

カウントダウン④脱「三無」

企業経営漫談士 岡野実空

コラム第2走へのバトンパスまで、いよいよ残るは5回。今回は、いまの世に溢れる「三無」からの脱却がテーマ。ここでは昭和の「無気力・無関心・無責任」に加わった平成・令和の新「三無」、「無教養」「無節操」「無思想」を取り上げ、そこからの個人的、組織的な脱却を考えます。

その1:「無教養」からの脱却

ここまでのコラムで何度か取り上げた、「一般教養」の重要性。しかし前号の「情報」導師、R・S・ワーマンの指摘どおり、まず受容すべきは自分の「無知」。とはいえ決して許されないのは、それを逆手に取った開き直りの「無教養」です。結局、私たちは生涯その修得に努めるしかありません。

また実際、インターネットやスマートフォンという革命が起きたいまでも、いざ難問にぶつかると、幅広い「教養」と豊かな「経験」が結び付いた、人間の「知恵」を超えるものではありません。

そこで実業に身を置く私たちは、その修得に際しひと工夫が必要です。既存の各分野を図書や先達から学びつつ、自らはそれらの「汽水域」にある知見の拡充に努め、それらの連係が生む「知恵」で組織や社会の複雑な問題解決に携わるのです。

その2:「無節操」からの脱却

上記「無教養」が惹き起こしてきた、数々の「無節操」な言行。古今東西それは途切れることはありませんが、昨今我が国で目立つのは、似非エリートによる同様の言動。受験をつうじて難易度の高い目標をムダなく突破する知識や技術だけを習得する一方、後に必要になる幅広い教養を身に付けないまま社会人になり、さらにその組織の中でも同じことを繰り返す。その有様は、先のシリーズに登場した戦前の似非エリート軍人そのものです。

さまざまな人間やコミュニティに触れたことがなく、組織の中の地道な下積みや挫折を経ないまま、エスカレーターに乗って出世しただけの人間が、組織のトップに立つと同時に妙な万能感に陥り、自ら墓穴を掘るのは火を見るより明らかです。

ワーマンと共に前号で初登場願ったマキアヴェッリ流にいえば、「節操を修得する最も有効な方法は、(若いうちに)無節操の道を(いくつか)体験しておくことである」ということでしょうか。

☞参照 『三々な経営』『続・三々な経営』

0-30 明日への遺言②マネジメントの汽水域

3-4 経営人の「三多」

E-29 経営人の必須体験

Z-07 続・3つのワーク①

☞参照 『四字熟語』で考える経営戦略

Y-01~12 「はじめに」~「おわりに」

その3:「無思想」からの脱却

先の「軍事学・地政学」シリーズを書きながら、改めて痛感したのは、明治維新および太平洋戦争の敗戦で起きた、「思想」転換の影響の大きさです。また戦後を振り返ると、戦争の体験をつうじた人々の貴重な「思い」が、後の復興や世代交代ともに徐々に薄まって行く、「無思想」への一本道が見えます。そしてその道を補修してきたのは、思想的な裏付けのない、「個人主義」や「拝金思想」などでした。バブル崩壊はそれに「虚無主義」まで加え、いままさに昭和が再現されようとしています。

さてそんな新旧「三無」が入り混じる中で、本来それに対処すべき宗教には昔日の輝きが見られず、逆にさまざまな社会問題を起こして、私たちとの距離を遠ざけています。そこで各界の多くの先達とともに推奨するのが、思想の「無」を埋める「空」(くう)の概念の修得。具体的にいえば、「般若心経」の学習と、それを柱にしたさまざま方々との交流です。それは仏教由来ながら、宗教や科学との壁を越え、多様な分野の人々から強い支持を集めています。特に自然科学者によるその解説ほど、私たちの「少教養」を補填してくれるものではありません。

因みに現在、我が私淑するのは、物理学者・佐治晴夫氏。それは先のコラム(Z-93)の最後に登場した、「学友」にして「書友」のA氏の示唆によるもの。「『宇宙のカケラ』(毎日新聞出版)読んだ?」

2022年12月12日 実空